

民生委員さんありがとう！ ～子ども達が挑戦した味噌づくり～

開園以来、自然に恵まれた環境の中で、野菜作り、動物の飼育を保育の一環として取り入れ、また地域高齢者を対象とする憩いの部屋、敬老の集いや地域住民と楽しむ夏祭り等を実施している。平成10年からは、大豆を作り、収穫した大豆で味噌を作るまでの工程を子ども達に経験させる取り組みを開始した。共同作業の中から協力することの意味・お互いに感謝する心・食物を作り育てる苦勞と喜びを味わい、そして何より自然を慈しみ大切にしなければならぬかを学んでいる。

社会福祉法人 **誠心福祉協会** 〒252-1123 神奈川県綾瀬市早川3067-5
TEL：0467-76-3841／FAX：0467-76-3842

◆ 法人の概要

法人設立年：昭和54年3月
経営施設、事業（数）：4施設
経営施設、事業（種別）：
保育所…1施設
障害者支援施設…1施設
軽費老人ホームA型…1施設
軽費老人ホームケアハウス…1施設

◆ 法人の理念・経営方針

福祉サービスを必要とする者が、心身ともに健やかに育成され、または社会・経済・文化その他あらゆる分野の活動に参加する機会を与えられるとともに、その環境、年齢及び心身の状況に応じ、地域において必要な福祉サービスを総合的に提供されるよう援助していく。

◆ 実施施設の概要

施設名：おとぎ保育園
施設種別：保育所 90名
活動開始年：平成12年度
活動の頻度・時間：2年継続事業
活動の対象者：地域民生委員、地域住民、
地域施設高齢者、在園児、
保護者、職員

活動実施の背景、実施にいたった理由

神奈川県の中央に位置する当園は昭和54年の開園以来、自然に恵まれた環境の中で、サツマイモ、ジャガイモ、トマト、ピーマンなどの野菜作り、豚、ヤギ、アヒルなどの飼育を保育の一環として取り入れ、また地域高齢者を対象とする憩いの部屋、敬老の集いや地域住民と楽しむ夏祭り等を実施している。平成10年から当園で実施している地域育児センターに、地域で活動されている民生委員にボランティアとしてお手伝いの協力を願い、育児センター参加の地域の未就学児と保護者とのかわりの援助を願っている関係の中で、一人の民生委員から「保育園の畑で大豆を作り、収穫した大豆で味噌を作るまでの工程を子ども達に経験させませんか？」との提案を受けた。飽食の時代の今、子ども達へ本当の意味での食への思いにつながるよい体験になると確信し、実施の運びとなった。

実施内容

最初の作業は、大豆用の1アール分の畑作りとプランター用の土を作る。プランターは大豆を蒔き家に持ち帰り保護者と一緒に育ててみる。播種する大豆は、神奈川県の「津久井在来」である。6月に播種をし、鳥に食べられないように薄い網を畑に被せ、発芽後3～4日で外す。7月下旬～8月下旬に草取り、その間、防除作業を行う。紫の小さな花が咲き、小さな産毛に包まれた緑の鞘がつき、数日の内にプクリとしたふくらみが見られるようになって枝豆として少量を収穫し、給食に添えて食す。大豆の葉が黄色くなり葉が落ちかかり鞘も色が変わる11月中旬、さあ！大豆の収穫である。びっしりと鞘が付いた茎をしっかりと握り、抜き取った大豆を組んだ竹竿に干す。家で育てた大豆を持ち帰った。干した大豆を12月初旬脱穀・選別を行い、11.6キロ収穫できた。来年蒔く大豆はこの中から取り分ける。

味噌仕込みの日は早朝より大豆を炊く作業をする。子ども達は興味津々で作業を見つめながら、自分の出番を待っている。

る。大豆と糶が入ったポリ袋を手や足で細かく潰すのが子ども達の仕事である。何回も何回も繰り返し行い味噌樽に詰め、押し蓋と重石をし、ごみや虫など汚物が入らないように覆いをして保管する。翌年7月に天地返しをし、また発酵と成熟期間を置き足掛け2年かかった味噌が程よく発酵、熟成された10月に、その年の3月に卒園した子ども達を招き、民生委員ともども味噌パーティーをして、美味しくできた味噌を味わう。

活動効果

提案した民生委員の中でも農業経験のない委員達は、最初から賛成ではなかったと聞き及んでいる。何回かの話し合いの後、全員の合意を確認してから当園との打ち合わせに入る。畑をならし、畝を作るのは最初の共同作業である。関わった人達が、その人なりに多くの収穫が得られた一連の作業工程であったと思われる。この活動は食育活動ではあるが、健全なる人間育成の貴重な場でもあった。

共同作業の中から協力することの意味・お互いに感謝する心・食物を作り育てる苦勞と喜びを味わい、そして何より自然を慈しみ大切にしなければならぬかを学べた。食に対する知識はもとより、食への適切な判断と選択する力を習得し健全なる人間を育むことが食育活動と言われたように、その育ちにはとても良い経験であった。9月下旬に枝豆として給食に添えたとき、「美味しい！これ本当に僕達が蒔いた豆からできたの？すごいね！」満面の笑みで枝豆を口に運ぶ子ども達のなんといきいきしていたことか！見つめる職員顔もまた嬉しさに輝いていた。11月中旬収穫で、家から持ち帰ったプランターを見ながら「実が付いていないね」、「鞘の中に実がないね」、「水をあげすぎちゃった！」、「畑じゃないからできないんだよ」、「保育園でいっぱいできたからいいよね」などおしゃべりに花を咲かせていた。12月下旬の脱穀は棒で鞘をたたく作業、「キャー豆が飛び出してきた！」「先生豆が踊ってる」「豆がジャンプして出てきたけどどうしてジャンプできるの？」ここでも不思議がいっぱいの言葉が飛び交っていた。関わった人達に「ありがとう」と言う子ども達の心の中には、言葉以上に深く尊いものが得られたと確信している。

今後の課題

平成20年度、当園が所在する地域に地区の社会福祉協議会が設立された。さまざまな活動の拠点として期待されているところである。当園でも味噌作り、地域育児センターへの民生委員の援助などの枠を越え、地区社協との連携の中で園の持つ資源がどのように地域の中で活用できるのか、又従来実施してきた行事等がどういう形でより深く地域に反映されるかなどを考え、話し合っていく事項である。

味噌作りについては、農業に従事した子どもが卒園後、在園していた時を思い出して今度は味噌作りや野菜作りのサポーターとして参加してくれることを願い、地域とともにある施設として開園以来の事業とともに、この事業を継続させながら今ある自然の恵みを絶やすことなく、次代へバトンタッチできるよう微力ながら努力していく所存である。

